

当社のまちづくり支援事業と晴海の変遷

当社設立(1964年)から今に至る当社のまちづくり支援と晴海のまちの変遷をご紹介します。

1964年(昭和39年)



(画面手前から晴海地区、月島・勝どき地区、その奥に隅田川が流れています。)

写真は1962年に撮影

晴海の埋立事業(約100ha)は、明治初期から開始され、1966年に現在の面積が完成しました。東京湾臨海部は、港湾施設が立地する地区として東京の発展に重要な役目を担ってきました。隅田川に架かる勝鬨橋を通る晴海通りは、晴海と都心を結ぶ交通の重要な幹線でした。

晴海は、港湾施設と倉庫として利用されてきましたが、港湾施設以外で目立つ施設としては、1957年に竣工した日本住宅公団の晴海団地(右奥の団地群)と1959年に開場した東京国際見本市会場(ドームを中心としたエリア)でした。晴海団地は、発足間もない日本住宅公団が、今では当たり前となっているDKタイプや各種の新技术の提案を行っていましたし、東京国際展示場では、毎年、東京モーターショーが開催され、国民の豊かさへの憧れを反映して、多くの人で賑わいました。

1964年、「東京オリンピック」が開催され、日本は戦後復興から高度経済成長へと移行を遂げていた年に、当社は、建築・住宅分野において住宅の大量供給や建築技術の近代化が強く求められていた社会状況を反映して設立されました。1967年に東日本最初の常設屋外住宅展示場を開設し、「建築・住宅全般の合理化、近代化、総合化」を目標に社会の発展に寄与してきました。

2006年（平成18年）



日本経済の発展とともに、東京都心に近接した東京湾ウォーターフロントの開発が盛んになり始めました。

晴海では、1984年に晴海の地権者により「晴海をよくする会」が結成され、協力して最良の街づくり計画の策定と実現に向けた活動が始まりました。当社は、設立当初から主要メンバーとして計画づくりや事業化の実現に向け活動を続けてきました。

1996年に東京国際見本市会場が閉鎖されましたが、リーディングプロジェクトとして晴海1丁目市街地再開発事業が計画され、当社も、地権者の一員としてこの再開発事業に参加し、再開発組合の副理事長や理事長として組合活動を支えてきました。

2000年、都営大江戸線「勝どき駅」が開設、2006年には晴海大橋が完成し、晴海通りを通じて都心と臨海副都心が直接結ばれるようになり、地域の交通事情は大きく改善されました。

2001年、「晴海アイランドトリトンスクエア」の竣工と交通条件の改善に支えられ、周辺地域の開発の機運も次第に高まってきましたが、晴海5丁目（晴海の最も手前のエリア）の開発計画は決定されず、2016年東京オリンピック招致活動の中では、メインスタジアム建設地予定地とされました。

2016年（平成28年）



2013年9月にオリンピックの東京開催が決定され、晴海には選手村の建設が計画されました。

築地市場の豊洲（写真最手前部）への移転が進み、環状2号線は、墨田川架橋部と築地市場跡地部の完成を待つばかりです。晴海地区や月島・勝どき地区では、超高層タワーマンションの建設により、居住人口が増加すると共に次第に地域の活気が出始めています。

2019年（令和元年）春



2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催に向け、選手村の工事も進み、多くの建物が姿を現しています。豊洲新市場が開業、環状2号線も暫定開業し、居住者・就業者の急激な増加に伴い手狭となった都営大江戸線の勝どき駅の大規模改修工事も完成に近づきつつあります。

2022年（令和4年）春



コロナ禍により 2021 年の開催となりましたが、オリンピック・パラリンピック競技大会を終え、晴海 5 丁目の選手村は 5600 戸の住宅地へと衣替えが進み、オリンピックを機に BRT の運行も始まりました。隣接の勝どき地区では、再開発により 3600 戸の住宅が建設中です。街は大きく発展成長しています。また、2022 年 11 月には、銀座から晴海を経て臨海部に至る地下鉄新線で、東京都知事より、7 駅を新設し、2040 年までの開業をめざすとの計画が発表されました。

当社は「晴海をよくする会」の会長会社として、当地区の課題である交通問題解消のため、「都心・臨海地下鉄新線」の建設推進活動に参加するとともに、行政機関等と協力し、地区の価値向上・活性化のための街づくり活動を積極的に支援しています。